

きそさき 木曾岬町




- ① トマト ————— 全域
- ② 伊勢湾台風 ————— 全域



特産物

トマト

木曾岬町

終戦後、食生活も変わり、農家では、これまでのように菜種^{なたね}や馬鈴薯^{ばれいしょ}の裏作^{うらさく}では採算^{さいざん}が合わず、1956（昭和31）年にビニールハウスによるトマト栽培が行われました。木曾川^{きそがわ}河口のデルタ地帯に広がる木曾岬町の温暖な気候が見事に適合し、糖度^{とうど}が高いトマトが収穫されました。以来、名古屋市場が近いという立地も加わり、30年以上前からトマトの指定産地として、県内最大の栽培面積を誇り、昭和40年代にはトレードマークの「」は全国にその名を広げました。

「ハウス桃太郎」を始め、いろいろな品種のトマトの栽培で、木曾岬町は全国的に知られています。農家の人々のきめ細かな管理が実を結び、10月から翌年6月まで途切れることなく収穫されます。また、ビニールハウスの大型化や、一部農家におけるロックウール栽培の導入による多収・低コスト生産の工夫が進められています。10数年前にはマルハナバチの導入による労力の削減などの取組、最近ではトマト栽培への新しい技術の導入による省力化^{しょうりょくか}の取組も進められてきています。



トマト栽培（木曾岬町提供）

- 農家の方はトマト栽培において、他にどんな工夫をしているのか調べてみましょう。

災害

木曾岬町

いせわんたいふう
伊勢湾台風

「伊勢湾台風」は上陸時、日本では史上3番目に気圧が低い929.2hpa（ヘクトパスカル）を観測した超大型の台風で、室戸台風、枕崎台風と並ぶ昭和の3大台風といわれています。

1959（昭和34）年9月26日の夜に上陸した「伊勢湾台風」による高潮のため、木曾岬村（当時）の南半分の堤防は寸断され、死者328名、流出家屋171戸、全壊家屋95戸などの今まで経験したことのない大きな被害を受けました。木曾岬町内には、現在もたくさんの慰霊碑が残っています。

台風によって学校も損傷を受け、12月に仮復旧するまでの間、小中学生は三重県鈴鹿市内の鈴峰荘という施設で、教師とともに寄宿生活を送りながら勉強しました。親と離れての生活はとても寂しいものだったそうです。

被害からの復旧のために、たくさんの人々が天秤棒を担いだり、トロッコを押ししたりして、作業をしました。しかし、台風による塩害で、その後何年も田畑が不作となるなどたくさんの苦労がありました。



当時の伊勢湾台風の様子（木曾岬町提供）

- その後、たくさんの人々の努力によって台風に対する取組が進められてきました。どんな取組が進められてきたか調べてみましょう。

COLUMN
コラム

わ じゅう
輪 中

輪中は愛知県、岐阜県、三重県の県境を流れる木曾川、長良川、揖斐川とそこに流れ込む小さな川の流域で、水防のための共同体がある地域をいいます。伊勢湾に注ぐ川によって土砂が運ばれ、海上にできた寄り洲に葦草が生え、洪水のたびに土砂は堆積を繰り返し、これらの地域の地形が誕生したと考えられています。三重県では桑名市多度町の一部、桑名市長島町、桑名郡木曾岬町が輪中を形成しています。

江戸時代の始め頃から次第に干拓が行われ、多くの輪中が作られ、農業や漁業が営まれる中で治水や利水のための組織が作られました。輪中で堤防が切れると輪中内全域が水没し、大きな被害が生じて死活問題になるので、水害に備えて水防組を作ったり、堤防には水防小屋を作ったりしました。個人では、屋敷の一部を高く盛って水屋を作って避難場所にするなどの自衛手段を工夫しました。

輪中地域では河川がもたらす豊かな土砂と堀田に代表される豊富な水によって多くの作物が作られてきました。

【→P111*64】



輪中の航空写真（輪中の郷提供）



輪中を横から見たイメージ図（輪中の郷提供）